

○吉田宗恂『医方大成論抄』と吉田宗桂の謎（要約版）

島野達雄

『医方大成論抄』は、宋代の陳無沢『三因方』や嚴用和『濟生方』に記された病因・病症・処方にもとづき、元の孫允賢が著した『医方集成』が出発点となっている。

続いて明の彦明公が各種の処方を追加し、『医方大成』と名づけ、さらに彦明公の子孫である明の熊宗立（1409－1481）が大幅に処方を追加して編纂したのが、『医書大全』（王元福序・24 卷）である。『医書大全』は、堺の医師、阿佐井野宗瑞が大永八年（1528）の建仁寺月舟の跋を添え、私財を投じて覆刻（和刻）している（日本最初の刊行医書？）。

この熊宗立『医書大全』のなかから、風論から痘疹論までの 72 門の「医論」を抜き出したものが『医方大成論』である。この作業は日本でおこなわれており、『医方大成論』という漢籍があるわけではない。『医方大成論』は、宗恂をはじめ多くの医師・医学者の研究対象となり、日本の伝統医学「漢方」の発展をうながす原動力となった。

『医方大成論』を講義した人々は、宗恂とその父宗桂、建仁寺月舟、公家の山科言経、越前の谷野一栢、曲直瀬道三（一溪）、道三（玄朔）などをあげることができる。

『医方大成論抄』とは、そうした講義の抄録（聞き書き）を意味している。

以下、『医方大成論』は『大成論』、『医方大成論抄』は『大成論抄』と略記する。

(1) 宗恂の『大成論抄』の構造——宗恂解と頭書による計量分析

天正 3 年（1575）の自跋をもつ宗恂の『大成論抄』は、一丁を上下二段に分けた構造をしている。当時の抄物の例にならい、原典である『大成論』の文は含まれていない。

下段は『大成論』の主要語句や難漢字に宗恂が加えた「意安宗恂解」の領域で、一丁 22 行・一行 17 字の訓点つき漢文となっている。この宗恂解の漢字数は約 6 万 5 千字に及ぶ。

上段は 450 個をこえる頭書（頭注）にあてられており、主に立安（秦宗巴）や養庵（曲直瀬正琳）など、曲直瀬道三（一溪）の流れをくむ医師たちの補足が細字で記されている。

これらの人名が部門ごとの頭書に登場する回数は、たとえば立安は寒門と癆瘵門で各 10 回、傷寒門で 8 回あらわれ、立安は寒・癆瘵・傷寒を得意部門としていたと推定できる。

同様に宋の陳無沢『三因方』の書名は、瘡門の頭書に 10 回、傷寒門に 9 回あらわれ、『三因方』は瘡・傷寒を専門分野として詳述していると推定できる。

また、人名と書名の相関係数は、養庵と、金の劉完素（河間）『傷寒直格論方』が 0.757 と際立って高く、養庵は『傷寒直格論方』を専門的に研究していたと推定できる。

おそらく道三流医術の学寮、啓迪院（啓迪庵とも）で後進に教育をおこなった医師たちは、専門を分担していたのであろう。

むしろ、人名と書名の相関行列を利用して、主成分分析も可能である。

このようなフルテキスト・データにもとづく計量分析は、今後の AI を使った歴史学研究的道具のひとつとなる可能性を秘めている。

(2) 宗恂の『大成論抄』の特徴——わかりやすい宗恂の解

宗恂解と頭書は、漢字の「醫」になぜ「酉」が付いているか、「方」と「法」の違いなど、分かりやすく、読み物として読者の興味を引く文章になっている。たとえば、王元福序の最後にある「岿辛酉至治初元文江王元福序」に対する宗恂解は、「岿ハ古ノ時ノ字ナリ」「至治（は）元ノ仁宗ノ嫡子英宗ノ年号。三年ニシテ改元ス。延祐ノ次ナリ」「初元ハ元年ナリ」「文江ハ処（ところ）ノ名ナリ」という調子で解説し、序文中の「予」には、「我ナリ、王元福ナリ」と丁寧の説明している。

また、宗恂は随所でいわゆる**原典批判**（テキスト・クリティーク）をおこなっている。たとえば口唇門では、「血少ナキ則ンバ藩シテ色無シ」に対して、「予、按ズルニ藩ノ字、当ニ藩ニ作ルベシ。伝写ノ誤ナリ。諸書多ク藩ニ作ル」、「膿胞ノ字ノ下ニ『蘭室秘蔵』ニ「或生小紅斑」ノ五字有リ。故ニ三等ト曰ウナリ。疑ラクハ大成（大成論）、闕文（けつぶん）ノミ。孫允賢ガ誤ルカ、伝写ノ誤リカ」と疑問を投げかけている。

このような指摘は、講義の原典である『大成論』の本文の意味を理解していなければ、おこなえない。言いかえれば、宗恂は原典を読み込んだ上で、誤字や闕文を指摘している。

(3) 『医方大成論抄』の諸本

『大成論抄』の諸本は、大きく四種に分類できる。代表的なものを示しておく。

【**第一種**】宗恂の『大成論抄』に依拠したもの。

寛永15年（1638）の自跋を持つ回生庵可敬（玄璞）が著した『**医方大成論口義**』（杏雨書屋蔵・整版本）は、宗恂解を「意安恂云」「恂云」として全編にわたって引用している。

【**第二種**】初代道三一溪および二代目道三玄朔（号は東井）の講義に依拠したもの。

京大文学研究科に残る『**医方大成論釈談**』（写本）は天正7年（1579）10月12日から玄朔が啓迪庵でおこなった講義の聞き書き。咳嗽門だけは道三（一溪）が講釈をしている。この第二種には、寛永3年（1626）の年記がある**小瀬甫庵旧蔵**『大成論抄』（杏雨書屋蔵・写本）も含まれる。内容の一部は、「東井先生曰」「東井曰」「東井翁曰」として、宗恂の『大成論抄』に転記されている。**奈須恒徳**（玄盅）の奥書に「この抄は東井先生が秀次事件に連座して常陸の国に配流されているときに作ったものであろう」とある。

【**第三種**】著者未詳の古活字版『医方大成論抄』（京大近衛文庫蔵。以下、**近衛本**とよぶ）と文章が一致している活字本のグループ。

近衛本は半丁あたり23字13行の漢字カナ交じり。杏雨書屋蔵の『医方大成論抄』（**杏雨本**とよぶ）は、『三因方』を「三周方」と誤るなど、一字一句、近衛本と同じ文章だが、半丁あたりの字数や空白の配置が異なり、約24字13行となっている。長沢規矩也が紹介した、日光山「**天海蔵**」の『医方大成論抄』も、この第三種であろう。

杏雨書屋は、巻末刊記が「元和九年（1623）癸亥仲冬吉辰刊之」とある活字本も所蔵している（**元和九年本**とよぶ）。半丁あたり21字12行。文章は近衛本と同じだが、近衛本および杏雨本にある「竜庵」を「龍庵」としている。竜庵については、次章で詳述する。

【第四種】その他、独立系のもの。

正保4年(1647)に和歌山の就安斎玄幽(道三一溪の孫弟子)が書いた『医方大成論抄』(京大富士川文庫蔵・整版本)は、注釈の見出しが一字台頭するなど、読みやすさに配慮したレイアウトを採用している。岡本為竹(一抱子)著の『大成論諺解』(杏雨書屋蔵・整版本)は、総フリガナつき漢字カナ交じり文。脈の取り方の図解もある。

『大成論抄』は時代を経るたびに、レイアウトに工夫が凝らされ、読みやすく分かりやすくなっている。宗恂の『大成論抄』は、その先駆的な役割を果たしたと言えるであろう。

(4) 吉田宗桂の『医方大成論』の講義

『言継(ときつぐ)卿記』は、宗恂の父宗桂が天文19年(1550)閏5月に11回にわたり一条邸で『大成論』を講義した、と伝えている。この年、宗桂は39歳。連続講義のために原稿を用意したことであろう。少なくとも手控え(メモ)は書いたであろう。

それを想像させる一節が、宗恂の『大成論抄』の痢門「毒物に因る」条にある。

「師云、食物の毒にあたつて発せば何物ぞと問ひ見わけて、麴毒・蘿蔔子・酒毒・葛花・諸魚の毒は黒豆の煮汁にて解する如く物に依りて解すべし」。

この「師云」の右上、宗恂解の行間に、細字で「桂子ノ頭書也」とある。

また嘔吐門「何の部利せず」条にも、「師云」として師説を述べ、最後に「是桂子頭書也」と細字の割注がある。二つの「桂子頭書」は後筆ではない。整版印刷である。

これらの「桂子」は吉田宗桂(1512-1572)を指す。宗桂とともに二度の渡明を果たした天龍寺策彦周良の『策彦和尚入明記』の天文10年(1541)7月13日条に、「生上司・東南坊・桂子・熊松・中林孫六ヲ携エテコレニ赴ク。酒三行」とあり、一回目の渡明が終盤に近づいた同25日には「早旦、桂子ヲ脇船頭ノ処ニ」遣わし、27日には、周防国主、大内義隆への報告に、「先ズ桂子ヲ差シ上ゲ」ている。

すなわち「桂子頭書」は、吉田宗桂がおそらく『大成論』の刊本または写本の上部に、「師云」以下を頭注として記し、宗恂が『大成論抄』にそのまま取り入れたことを意味している。

なお、ここでの「(宗桂の)師」が誰を指すのかは判然としない。吉田角倉家で初めて「角倉」の屋号を名乗り、晩年嵯峨で医術を嗜んだという吉田徳春(仁斎)、足利義政に医術で仕えた吉田宗臨(忠兵衛)などの可能性も否定できない。

(5) 宗棧竜庵の謎

宗恂の『大成論抄』の積熱門「陰盛血衰」条には、宗恂の父意庵宗桂が登場している。原漢文と訓読したものを次に示す。

陰盛血衰(陰盛ニ血衰フ) 予父意庵曰、陰字當作陽字、伝写誤也、故奈何、積熱証也、又下曰、血衰云々、陰與血一理也、明是陽字(予ガ父意庵曰ク、陰ノ字、当(まさ)ニ陽ノ字ニ作ルベシ。伝写ノ誤リナリ。故(ゆえ)奈何(いかんとなれば)、積熱ノ証ナリ。又下ニ曰、血ヲシテ衰フト云々。陰ト血ト一理ナリ。明ラカニ是レ陽ノ字)。

この部分の近衛本・杏雨本は次の通り。

陰盛血衰、或云陰病サカンニシテ血ヲトロユル也。又竜庵宗栴曰、陰字マサニ陽ノ字ヲナス。伝写ノアヤマリナリ。イカン（「ハ」が欠落か）積熱ノ証也。又下ノ交（文の誤りか）ニ曰血衰云々。陰ト血ト一理ナリ。明（「ラカニ」が欠落か）是陽ノ字。

先述した『大成論抄』の分類【第三種】の活字本のうち、元和九年本は、近衛本・杏雨本とはわずかに異なり、「竜」が「龍」になっている。

「竜庵」が「意庵」を指すことは明らかであろう。「意」の字から「心」を取り去り、「し（イン・イツ・オン。かくす）」を付け加えれば、「竜」となる。竜は龍の古字にあたる。

「宗栴」の「栴（エン）」は五行説の五元素、木火土金水の木と火から成っており、次に土が来ることは、この時代の人々には簡単に解ける漢字パズルであったことであろう。

つまり「竜庵宗栴」および「龍庵宗栴」は、意庵宗桂を意味している。

宗恂の『大成論抄』の「予が父意庵曰」以下は、近衛本の「竜庵宗栴すなわち意庵宗桂曰」以下の文とごく一部を除いて同じ文章と見てよいだろう。すなわち宗恂は、「予が父意庵」が近衛本のなかで、「陰字マサニ陽ノ字ヲナス。伝写ノアヤマリナリ。イカン（は）積熱ノ証也。又下ノ交（文）ニ曰血衰云々。陰ト血ト一理なり。明（らかに）是陽ノ字」と述べた、と指摘しているのである。

以上を論拠として、近衛本に代表される『大成論抄』の【第三種】活字本の原著者は吉田宗桂であると結論できるであろう。

近衛本と杏雨本が意庵宗桂と明記せずに、なぜ竜庵宗栴としたのか。

結論から言えば、その理由はわからない。宗桂自身が漢字パズルとして読者に出题したのかもしれない。出版書肆がたわむれに出题したのかもしれない。三本が三本とも吉田角倉家の許可を得ていない偽版（海賊版）の可能性もある。

(6) 吉田宗恂と吉田光由を生んだ吉田角倉家

『寛永諸家系図伝』は、吉田角倉家の意安を名乗った医師のなかで、宗恂がただ一人、「姓名を知らる」と著名人であったと記している。

一族の家系をまとめた『角倉源流系図稿』は、算術書『塵劫記』の著者吉田光由（1598-1672）も宗恂と同じように「姓名を都鄙に知らる」としている。

吉田角倉家は、医学と数学の二つの分野で、世に知られた才能を生み出した。

だが、前稿「パウロ意安—吉田宗桂の謎」で述べたように、吉田角倉家の学術における中興の祖ともいうべき吉田宗桂の伝記は曖昧なままである。

医学史が「医学とは何か」という問いに答えることをやめ、医師や医学者の伝記に終始することは、避けるべきであろう。だが、吉田角倉家の人々には、伝記を記そうとしても、その一端さえもさえぎる深い霧が立ち込めている。

その霧を晴らすのは、従来の歴史学の方法論を超える、デジタル社会に対応した方法論ではないだろうか。